

故郷の海辺2021秋

ふるさと登別市幌別の浜辺に10月初め、足をのばした。この砂浜に立つのは、60年ぶりかもしれない。いつの間にか出来たバイパス沿いの防潮堤や消波ブロックが、太平洋を望む景勝地としての色つやを帳消しにして、マチ場からの気楽な往来を阻んでいた。しかし、どうかして浜辺に出ると、そこにはドドッと砕け散る荒波の、寄せては返す無窮の営みがー。今月号のトップを飾るのは、故郷の浜辺にちなんだ話2題です。

其の1 石場斎宮の歌

みだれ矢に 立まふ袖を忍ぶかな
霰(あられ)たばしる ほろべつの磯

この歌を詠んだのは、東北・南部藩の藩士で函館奉行支配調役だった石場斎宮。南部藩は安政2年(1855)、恵山岬から東側の沿岸警備を幕府から命じられ、石場は山越内からモロラン、ホロベツ、勇払場所の統括責任者を務めた。和歌の名人でもあったらしい。ゆえの一首が先の、幌別の浜に立って詠んだ歌。元道立文学館館長だった木原直彦さんの著書を読んで見つけた。

俳句ならまだしも、和歌、あるいは短歌といわれる分野はどれも苦手だ。高校時代、国語の教師から「あしたの試験は全部百人一首を出すから覚えてこい」と授業中に言われ、「どうせ、うそだろう」と高をくくっていた。翌日、答案用紙を開いたら、30首くらいだったか「カッコ内の下の句、あるいは上の句をすべて埋めよ」ときた。結局、「乙女の姿しばしとどめん」しか書けず、ワタクシ史上最も恥ずかしい赤点を取った苦い記憶がある。

その仕切り直しではないが、この歌の意味するところは何だろう、と謎解きに挑んでみた。

まずは「みだれ矢」。これをキーワードにネット検索したら、着物の縞地の写真とともに「松阪木綿 乱れ矢鱈 無地、太縞、細縞が乱雑に組み合わせられた現代風の矢鱈縞です」なる解説文が出てきた。

ということは、矢鱈縞模様の着物姿の人が舞い踊る姿を、霰ふる幌別の浜でしので詠んだ一首か。

ところが、ほかの語句を手掛かりに探偵を続けてい

ると、今度は一部がそっくり、源実朝の歌に出てきた。
ものの心の 矢並つころふ 籠手の上に

霰たばしる 那須の篠原

「矢並つころふ」とは、矢の並びの乱れを整えること。狩場で武士が籠(えびら)の中の矢並を整えていると、その籠手の上に霰が音をたてて飛び散る光景を歌ったものらしい。

こりゃあ、斎宮先生、実朝の歌を一部失敬したのかな？ 和歌に詳しい地元の歌人を探さなくては。

其の2 波打ち際のホームレス？

手拭いをほっかむりし、流木に腰掛け潮騒に心遊ばせているのは、Tokyoあたりから流れ着いたホームレスさま(右上の写真)？ ではありませんね。向こうの砂浜にかすかに見える2本の釣り竿の主であり、かつての職場の同僚F君だ。近く of 幌別川には漁業権が設定されていないため、密漁のお咎めはない。最盛期には、大阪ナンバーの車も目につくとか。

で、午前10時ころから竿を立て、釣りを終えるのは午後2時ころだが、鮭だけでなく、ほかの魚もまったく釣れないようだ。「それでも、いいんです」とF君は澄まし顔で言う。

まるで、真っ直ぐな針を川に垂らし、西周の領主に見出された太公望のように。

「何が釣れますか？」

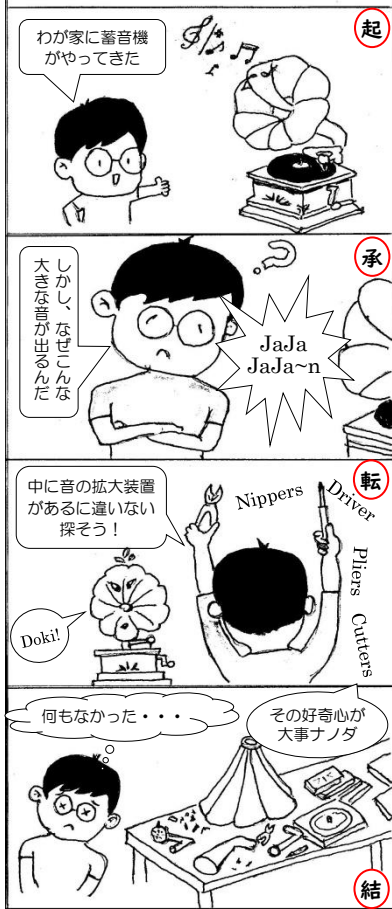
「天下を釣っておるのだ」

その後、稀代の軍師として名をはせた本名・呂尚の箴言「覆水盆に返らず」は、また有名。

さてF君は、何を釣ってるのやら。

好奇心は大切だ!

By 3号



初挑戦

4コマ漫画「Iさんの回想」

先月号で、真空管式ラジオ修理の話題を提供したところ、横浜のIさんから「家族の歴史的遺産継承」に関連して、小学生の時にSPレコードの蓄音機を分解して捨ててしまった経験ありとのメールを頂戴しました。以下はその要約です。

「蓄音機が1枚の円盤からどうしてあんな大きな音を出すのか、もしかして内部に『音(おと)拡大装置』のような、なにやら魔法の仕組みが組み込まれているものだと想像しました」

親が「もう使わない」と言ったので早速分解して内部を調査したI少年。「音の出口である開口部側から外して、レコード針の付いているヘッド部分の方へ徐々に分解していったのですが、なかなか魔法の装置は出てきません。結局ヘッドまで辿り着いても何も無く、私は魔法装置が無かったことに愕然としました」

結局、渦巻のホーン効果で大きい音が出ていたことを知り、(仕組みは、これだけか)と衝撃を受けたという。バキバキにこじ開けられた蓄音機は元に戻せるはずもなく、ゴミ箱行きの運命に。

「今でもたまに思い出します。私があんなことしなければSPレコードを聞ける環境が残っていたのにーと」

いやいや、少年時代の、その知的好奇心が何より大事なのです。ということでご本人の了解を得て、当時の模様を4コマ漫画にしてみました。

今秋、ノーベル物理学賞を受賞した真鍋淑郎さんが、皮肉をこめてこう警鐘を鳴らしています。

「日本では好奇心に駆られた研究が減っている」

やはり、好奇心は大切です。

おじさんズ通信11号で来た! 映画「第三の男」に出てくるような並木通、見つからなかった 枯葉が庭を埋めていく もたもたしていたら雪の季節だ この冬、灯油がえらく値上がりしそう 聞け! 年金生活者の悲鳴を

ペンネームと判子

地元文芸誌への作品投稿で、使い分けしているのがペンネーム(PN)。創作は時々女性に間違われるので本名の一番下の字を削除、詩は園太一(「その他いち」)、シナリオは今田角蔵(「今だ、書くぞ」)てな具合。いつか、ユーモアミステリーでも書く機会があれば、椎名綾(氏と名を逆読みして、ご想像を)のPNにしようかな。

「蒐める人」のタイトルにひかれ、中身も確認せずにアマゾンで取り寄せた本の著者名が「南陀楼綾繁」=「なんたろうあやしげ」。中身はいたって真面目で、国立国会図書館の最初の館員・稲村徹元や日本古書通信社の代表を務めた八木福次郎など、書物の世界において名だたる「蒐める人々」にインタビューし、まとめた本だ。

しかし、PNにはいろいろ由来があるので、麻雀小説家阿佐田哲也の「朝だ! 徹夜だ!」は超有名。ネット耳学問ながら、山手樹一郎は山手線沿線に住んでいたので「山手線一郎」にしようとしたら周囲に反対されたので一文字変えて「樹一郎」にしたらしい。傑作は二葉亭四迷(ふたばてい しめい)。自分の文学

への熱意を理解してくれない父親から、「くたばってしめえ(しまえ)!!」と怒鳴られて、この筆名が生まれたとか。

こんなエピソードに思い出しながら、「おじさんズ通信」手渡し封筒の裏に押す「今田角蔵」の消しゴム判子をついに作製。ささやかな芸術の秋を遊んで候です。



薫風 烈風

▶この通信、ネット環境にある方にはPDFにしてメールに添付して送っております。カラー印刷が可能な方は、プリンターの設定を「両面印刷」にしてA4で紙出しすると、PC画面で見るより目が疲れなかと…。

▶横浜のIさんに蓄音機の話、今月号で取り上げたいと問うと「好きなように料理してください」との返信あり。なら、マンガが一目瞭然かと、初めて、4コマ漫画制作に挑戦しました。セミプロでもないのに、I少年のキャラはネットにころがる無料イラストをコピーして3段活用しました。この先、機会があれば我流スケッチも、読者のお目々を汚さぬ程度に載せようかな。それでは、皆さま、お元気で〜。